

日本人ボリヴィア移住の歴史

～ 戦前移住と戦後移住 ～

戦前移住 1899年9月～

戦後移住 1956年8月～



(外務省「日本と中南米をつなぐ日系人」より)

はじめまして

- わたしは、日本からいちばん遠い国、地球の裏側にあるボリビアで生まれ育ちました。
- わたしは、日本人ですが、ボリビア人でもあります。
- 30歳で日本にやって来ました。

ボリビアに、日本があることを、ご存知ですか？

アイデンティティ

- 日本人でもあり、ボリビア人でもあることについて説明
- ここでは、皆さんに次のことを共有したいと思います
 - なぜ、わたしは日本人なのにボリビアで生まれたのか
 - なぜ、わたしは日本に来たのか
 - など

Agenda

1. 日本人の南米移住史

1. 日本人の南米移住史

ボリビアの日本人コミュニティ

- 戦前移住（第二次世界大戦前）
- 戦後移住
 - コロニア・オキナワ
 - サンフアン移住地

1-1. 戦前移住

南米移住者募集



移住国

ペルー
ブラジル
アルゼンチン

第1回
8月20日
第2回
12月10日

募集地

- 1 ポリビア移住者
- 2 ブラジル雇農移住者
- 3 ブラジル移民青年隊
- 4 アルゼンチン移民青年隊

申込は市町村役所へ

琉球政府経済局

ペルーへの移民 1899年9月～(明治32年)

- **ペルー**へ向かう790人の日本人移民が「佐倉丸」で横浜港を出航。
 - 移民団を組織した森岡商会という移民会社との**契約移民**
- **契約内容**
 - 「ペルーの**甘蔗耕地**あるいは**精糖工場**で4年間働き、その報酬として一ヵ月**2ポンド10シリング(約25円*)**に相当するペルー貨を支給される」
 - * 現在の物価に換算して約9万5000円

当時の物価

現在の3800分の1程度

明治時代の1円は、今の3800円ぐらいに相当

小学校の教員や警察官の初任給が8～9円程度

一人前の大工さんや工場のベテラン技術者で月20円程度

当時の庶民にとっての1円は、現在の2万円ぐらいの重みがあったのかもしれませんが

移住前の記念写真



ペルーからボリビアへ

- 佐倉丸のペルー入港後
 - 翌日から佐倉丸は沿岸を航行し、移民を12ヶ所の耕地に送っていった。
- 期待と現実
 - 移民たちの期待はすぐに裏切られることとなった
 - ペルー側の移民に対する認識不足
 - ペルー人の日本人に対する理解不足
 - 日本人移民の言語の壁
 - 日本人のペルー人に対する知識不足
- 対立とボリビア移住
 - ペルー人と日本人の間で何度も対立が起こる
 - ペルーから逃亡した移民がアンデス山脈を越えてボリビアへ再移住
 - ボリビアへの最初の日本人移民となった

ボリビア最初の日本人移民へ

- 1899年9月
 - ボリビア国内のベニ県へ、最初の日本人移民91人が定着
 - 当時は第一次世界大戦前の世界的なゴム需要があり、産地であるボリビアは経済的活況を呈していた
 - ペルーからの転入し天然ゴムの採集労働に従事したものの多くはベニ県のゴムの集積地であったリベラルタ周辺に定着
- 1918年にはボリビア国内の日本人移民の総数は800人強となり、そのうち約700人がリベラルタ周辺に居住していたともいわれている。

ゴムブームの衰退と日本人の定着

- ゴム景気の終わりに伴い、たった5年ほどでリベラルタ在住の日本人250人程に減少(1923年)
- 多くの日本人がボリビア国外や国内の異なる都市に転住
- 単身者はボリビア人と結ばれ各地に定住、商業活動等に従事していった。
- 各地に日本人会が設立
- 1932年～「チャコ戦争」
 - ボリビア・パラグアイ間で発生した石油埋蔵地の争奪戦争
日本人会による政府献金など、ボリビアにおける地歩固めに全力を尽くした
- 1941年～「太平洋戦争」
 - ボリビアは、アメリカ合衆国の圧力により**連合国側**として参戦、日本と敵対関係に
 - ボリビア在住の日本人に対する経済活動の制限、資産凍結など
 - アメリカ合衆国政府によりアメリカ本土への連行・抑留もあった
 - ボリビアの一般国民は日本人に対して極めて友好的であった

- 1923年には250人程にまで減ってしまった。東南アジアでゴム栽培が始められた影響から陰りをみせはじめ、第一次世界大戦終了時(1918)にはアマゾン奥地のゴムブームは完全に終わりを迎え、ゴム景気にひかれて集まっていた日本人もボリビア国外に出たり、ラ・パス、トリニダなどに転住していったのです。
- ほとんど皆が単身者であったので、ボリビア人と結ばれて各地に定住し、健全な家庭を作って、商業活動等に従事していった。そして各地に日本人会を設立し、1932年～35年までボリビア・パラグアイ間で発生した「チャコ戦争」(石油埋蔵があるという仮説を受けて)これらの日本人会が率先して政府に献金するなどして、ボリビアにおける地歩固めに全力を尽くしていた。
- 1941年、太平洋戦争が勃発すると、ボリビアは、アメリカ合衆国の圧力により翌年の4月6日に宣戦を布告し、日本との敵対関係に入った。その結果、日本人に対して経済活動の制限や資産凍結を行ったり、またアメリカ合衆国政府によりアメリカ本土に連行され抑留されることもあったが、一般国民は極めて友好的であった。

1-2. 戦後移住

戦後移住1956年8月～（昭和31年）

【コロニア・オキナワ】

- 太平洋戦争末期、沖縄は日本で唯一の地上戦場となった。多くの民間人が亡くなり、戦闘が行われたところは焼け野原、さらには日本の敗戦により1971年まで米軍による占領状態が続くことになった。こうした沖縄の惨状に、誰よりも先に救援の手を差し伸べたのは、自身も第二次大戦中に苦難の時を過ごしたボリビアの日本人移住者たちであった。
- ボリビアに住む日本人の中には沖縄からの出身者がおり、彼らは母国への救援活動を目的として、それぞれ新しく協会を設立し、救援資金や物資を送り始めた。また当時の沖縄は、米軍基地建設のために農地が不足する状態にあったことから、沖縄の戦災民に対してボリビアへの移住を呼びかけ、一方で入植地の調査を開始し、サンタ・クルスの近郊の土地を移住地として選定した。
- ボリビア在住の日本人を中心に、沖縄県人のボリビアへの移民計画を引き継いだ琉球政府は、1954年3月、「南米ボリビア農業移民募集」を制定し、移民募集を開始した。そして、6月19日、約4,000人の応募者の中から選ばれた第一次計画移民275人を乗せたチサダネ号（ロイヤル汽船）が、那覇港南岸の軍棧橋を発った。

1-2-1. コロニア ・ オキナワ

オキナワ移住地ゲート



- 8月15日には、彼らのために選定された土地「うるま移住地」に入り、すぐに同地の開拓を開始したが、この土地は全くの原生林の中にあリ、井戸を掘るまでは飲み水にも困るという有り様であった。12月になると、今度は病人が続出するようになった。後日「うるま病」と名づけられたこの伝染病に対し、近隣の国から医師団も派遣されてきたが、翌年4月までに15人が死亡した。
- 移住者たちは「うるま移住地」を放棄し、6月パロメティリアに転住を開始した。しかし、結局ここも安住の地とはならず、再度新しい移住地への移動が行われた。そして、1956年中には移住者全員の移動が完了し、翌57年にボリビア政府の認可を得て「コロニア・オキナワ」の基礎が確定した。その後1969年の第19次移住者まで合計3,231人が琉球政府の計画移民としてボリビアに入っていたが、こうした移住者たちには十分な広さの耕地は割り当てられず、半数以上の者はブラジルやアルゼンチンに転住していった。

現在「コロニア・オキナワ」

ボリビア
サンタクルス県
サンタクルス市

④0コロニアオキナワ農協 CAICO

穀物生産に加えて小麦粉・パスタなどの加工品を製造



ロゴ



施設



位置

記入：2021/02/05

[1] 組織の概要

組織名	コロニアオキナワ農牧総合協同組合 Cooperativa Agropecuaria Integral Colonias Okinawa RL (CAICO R.L.)		
代表者名	具志堅 正 Tadashi Gushiken Goya		
組合員人数	120 人	職員人数	17 人
設立年	1971 年	年間売上	785.700,00 USドル

- 大豆を中心とした雑作を行い、それに畜産を組み合わせた機械化による大規模経営が行われている。特に大豆はボリビア最大の栽培面積を誇り、国内最大規模の飼料・搾油工場とサイロを稼動して、ボリビアの有望な輸出産物に成長している。また、「コロニア・オキナワ」には第1次、第2次、第3次移住地があり、現在では沖縄県の農地面積をも凌ぐ6万ヘクタールもの農耕面積を有するまでに発展している。
- 農協組合があり、主な事業は組合員への営農指導で、組合員が生産している主な穀物は、夏期は大豆、米で冬期は小麦、トウモロコシ、ソルガムとなっている。その他にサトウキビの生産、そして畜産を営んでいる組合員もいる。
- 組合員が生産している大豆は、2014年に組合から分離した株式会社 CAICO S.A.で保管された後、加工品として国内外で販売されている。小麦は、2009年に設立され、現在は CAICO S.A. の子会社となっている Molinera Oki で、「Harina Okinawa」小麦粉及び「Fideo Okinawa」パスタが生産され、国内ブランドとして市場で販売されている。

コロニア・オキナワの課題と期待

課題

- 畑作の化学農薬の長期連用に伴う土壌中に蓄積及び残留による土壌環境汚染。
- 大豆の品質：我々の生産物は遺伝子組み換え技術を使用しており、日本の厚生労働省の品質基準を満たせていない。また我々にとっては植物検疫の基準を満たすのは困難である。

期待

- 日本企業には農作物購入の関心があることを期待する。我々の農産物を用いた新たなプロジェクト/製品を作り出すことやチアシードの商品化やゴマに関連のある機材や製品の導入（ゴマに関しては搾油やその他の付加価値をつけられる副産物を商品化するための機材や資材等の導入）これらの農作物の導入を検討しており、商品化のアイデアや実例などがあれば参考にしたい。

1-2-2. サンフアン移住地

【サン・ファン移住地】

- 1952年の「ボリビア革命」(軍事政権から打破させ、民族革命運動)で大統領に就任したビクトル・パス・エステンソロは、鉱山の国有化、産業の多角化、農地改革などの政策を掲げていたが、それを遂行できるだけの十分な労働力が当時のボリビア国内になかったことから、他国からの移住者誘致に積極的な姿勢をとっていた。当時、日本で精糖業を経営していた西川利道は、こうしたボリビア側の政策に注目し、自身もボリビアに進出して精糖業を興す希望を持ったことから「ボリビア国サンタクルス日本人移住計画書」を起案した。西川の呼びかけに集まった14家族88名は1955年7月、ボリビアへの入植を果たした。この西川利道に率いられた移民団は「西川移民」と称され、翌1956年8月2日に日本とボリビアの間で結ばれた「日本・ボリビア移住協定」に基づいて、1969年まで続く計画移民とは区別されている。

出発前の写真



サンファン移住地ゲート



西川移民はサン・ファンに入植

- 西川移民はサン・ファンに入植したが、この移住地も「コロニア・オキナワ」同様、原生林のまっただなかの土地であったため、森を切り拓くことから始めなければならなかった。



- そして、その労働の過酷さや降り止まない雨といった環境の悪さのため、多くの方はブラジルやアルゼンチンへ去り、またある人は日本へ引き揚げていった。



雨が降ると車は立ち往生した（日ボ協会提供）

現在のサンフアン移住地

ボリビア
サンタクルス県
サンフアン市

④1 サンフアン農協 CAISY R.L.

鶏卵・穀物生産に取り込む農協



ロゴ



施設



位置

記入：2021/1/7, Yuuki Mizushima

[1] 組織の概要

組織名	サンフアン農牧総合協同組合 CAISY R.L.; Cooperativa Agropecuaria Integral San Juan de Yapacani R.L.		
代表者名	Yuuki Pedro Yonekura Nishi		
組合員人数	102 人	職員人数	240 人
設立年	1957 年	年間売上	55,000,000 USドル

- CAISY は、組合員の営農活動の保護と生活の向上をはかり、地域住民と共により良い農村生活の創設を目指し、ボリビア国の発展に寄与する目的で、1957年に48人の日本人移住者によって設立された。当農協は小～中規模農家の日系人によって組職され、移住地の活動の主たる拠点にしている。
- 創立から約67年間、入植当初より様々な困難があったが、めまぐるしい農業情勢の変化の中にあっても、CAISYは常に新しい分野を切り開き地域の発展に貢献してきた。当農協は現在鶏卵と穀物の生産、研究、販売を主に事業を展開している。

移住地の生産物

- しかし、1970年代からは養鶏営農の定着と機械化が促進され、多角化・機械化による規模拡大で農業経営も軌道に乗って安定するようになった。現在では、米・大豆・ソルゴ・養鶏・とうもろこし・マカダミアナッツなどの栽培でボリビア国内有数の生産地となっている。



現在農産物は豊富です。



課題・期待

課題

- 今ある機械が古く生産性が低い為生産に関わる新たな技術が必要不可欠。
- 12月から2月の間、鶏卵の生産が不安定かつ低価格。この時期には50%の損失がある。また人件費/非常に高い税金(63%)。
- マーケティングの見直し、マスコットキャラ、イメージキャラの作成。

期待

- 砕米を米粉パンに利用するなどの技術を導入することができる。
- 廃鶏の処理や加工販売など施設投資資金や販売指導についてもサポートできるビジネスパートナー。
- 稲作機械、機具の新中古プロバイダーなど
- ボリビアは内陸に位置し、港までの輸出費用がかかるため、現地で生産した農産物を国際市場で販売するには、農作物を加工して軽量化を図る必要がある。現在は国内で販売しているが、リスク分散をする目的で輸出可能な農作物の導入を検討中である。組合は農家の集まりのため、日本企業から市場の情報を得て、当組合で検討し、生産・加工した後に日本へ輸出したいと考えている。当組合と信頼を深めてビジネスパートナーとして長く取引ができればと考えている。

サンフアン移住地の窓口



お役所：日本ボリビア協会

成人式



年間を通してのイベント



年に一度開催される、物産展の様子。

サンファン祭(入植を記念して)



運動会



盆踊り

敬老の日、高齢者福祉レク



展示会



書道生け花展示



ゲートボール愛好会による移住地親善試合



少年野球部の交流試合



茶道愛好会の初釜



両親の入植は、

父 1957年5月20日 当時 9歳(小学3年生)

母 1961年8月24日 当時 12歳(小学6年生)